

深イ〜話!

No.84

——がん患者さんとの心の通った治療を心掛けてこられた長堀優先生(育生会横浜病院院長)のお話——

これは私が10年くらい前に出会った患者さんの話ですが、その方はお腹の中にがんが広がっていました。そのことは彼女も知っていたのですが、いつもニコニコされていたんです。彼女はおそらく75歳くらいでしたが、私が回診で病室へ行くと、私の足音で近づいてくるのが分かるようで、いつもベッドの上で正座して待っているんです。

たぶんどの先生にもそうだったと思うのですが、「いつもありがとうございます」と正座したまま最敬礼をしてくれるんです。その顔は本当にニコニコで満面の笑みでした。

私はどこからこの笑顔が出てくるんだろうか、死が怖くないのだろうか、いつも不思議だったんです。

ある日のこと、いつものように素敵な笑顔を見せてくれた彼女が真剣な顔つきで尋ねてきました。

「先生、私は手術することもあるのでしょうか。」と。私は正直にお答えしました。

もう手術をしてもがんを取りきれないし、無理をするとかえって、大変な結果になると。

そうしたら、彼女が喜びましたね。

実は彼女には肝硬変の夫がいたんです。

子供がいなくて親戚も近くにいないから、お互い支え合って生きていかなければいけない。

だからこれ以上入院を続けて、家を空けているわけにはいかないと言うんですよ。

本当は旦那さんより奥さんのほうが病状はよっぽど重いんです。でも彼女はこう言いました。

夫のことが私は心配なんです。あの人は私がいなければどうしようもないから。

だからいつもがんの神様に、『もう少しおとなしくしていてね。私はもう少しあなた(がん)と頑張って生きていきますから、大きくならないでくださいね。』ってお祈りしているんですよ。って。

私はその言葉にとっても感動しました。

がんというのも細胞であって、米国の細胞生物学者ブルース・リプトン博士は

「細胞一個一個に、感性がある」という話をしています。

例えば、単細胞のミドリムシは餌があれば寄っていくし、毒が来ると逃げていく。

単細胞ですから脳みそも神経もないわけですが、そういったことが全部分かる。だから、博士は

「細胞はそれだけで完璧な生命体である。しかも生きる感性を持っている」ということを言ってるんです。

そうであれば、がんも細胞ですから生きる感性があるので、当然人間の思いとも関係してくる。

実際、彼女は長く生きたんです。もって一年という診断でしたが、三年半あまり生きることができた。

私は彼女の思いががん細胞に届いたのだと思っています。



ある難病の女性が自分のあらゆる細胞を褒めたら、驚異的に回復したという記事もありました。家族も協力して、女性の細胞を褒めたそうです。やはり細胞には感情があるんですね。

もし、どこか悪い所があるなら、その細胞を褒めてみてはいかがでしょうか。そして、なんともない所には「ありがとう」と感謝をしてみる。だって、タダじゃないですか?! 人がいいよってということは、片っ端からやってみたほうがいいと思います。実は西島も、毎日自分の心臓や頭、足や手に「ありがとう」って言ってるんですよ。(笑)